

一九六八年の私

宇波 彰

一九六八年に私は埼玉県の川越にある高校の教師をしていた。学園紛争の波はその田舎の高校にもひたひたと押し寄せてきて、学校のなかでは、生徒たちが職員会議の公開を求めたり、自主講座を開いたりしていた。自主講座には、自分の担当する科目以外のテーマで講義をする教員もいて、なかなか面白かった。

しかしそれはひとときの高波のようなものであって、日常生活に大きな変化を与えるものではなかった。私は、同僚の教員たちと飯能市のあたりを流れる名栗川に出かけてさかなをとりに、河原で天ぶらにしたり、秩父の鉱泉に泊まって札所巡りをしたりしていた。時には、麻雀に熱中していたこともある。

自由な時間がふんだんにあり、家族と旅行することもしばしばあった。まだ海外旅行が一般的ではなかった時代であるから、旅行といっても国内に限られていたが、奈良・京都・北海道と

いったいわゆる観光地のほかに、岡山県の高梁とか、滋賀県の甲賀の里のような、あまり人が行かないところによく出かけた。他人と同じ行動はしたくないという傾向が私には早くからあった。ずっと以前に、人間が他人と違った行動をしたり、一般的でない考え方をすることがあるのは、人間には、他人は必ず死ぬが、自分は生きていたいという欲望のためだという意見を讀んだことがある。それは、ヴァレリーの言葉だったようにも思うが、ヴァレリーはそんなことを書いているのだろうか。

私は高校生の頃から、級友に「変わっている」といわれていた。「変わっている」というのは他人と違った行動をしたり、異なった意見を持つということである。実際に、いまでも自分で正しいと思つて発言したことが、相手に理解されないで終わることがある。しかし、私も人並みに、他の人と同じような考

え方をしてきたつもりである。人並みに、大学生の頃には、詩や小説を書き、はじめに「詩人」になろうと思ったこともある。友人たちと同人雑誌を作って、「合評会」をしていたのであるから、ほかの「文学青年」と同じである。

一九六八年にも、まだ同人雑誌のメンバーたちとのつきあいは続いていた。雑誌も断続的に刊行されていたと思う。とにかく私は自分の書いたものあまり執着がないから、書いたものの保存がずさんである。そのころの同人雑誌はほとんどすべて散逸してしまって手元がない。そのころの記録がないのは仕方がないとしても、それ以後に書いたものもどこかにいつてしまい、著作リストを作れといわれても、途方に暮れるばかりである。ただ記憶にあるのは、一九六八年に私は小林秀雄をよく読んでいたということである。私が小林秀雄を読んでいたのはたぶん福田恒存の影響である。そのころにはすでに解散してしまっただが、福田恒存氏を中心にして、佐藤信夫や中村保男たちと讀書会をしていたことがある。カッシーラーの「人間」、アーバンの『言語と現実』などが選ばれた。福田氏は黙ってわれわれの意見を聞いていて、最後に締めくくることが常であった。その福田氏がときどき小林秀雄の言葉を引用していたことが思い出される。福田氏は並はずれた記憶力の持ち主で、「それはその本の何ページに書いてある」といつていた。(ただし私はその後の福田氏があまりにも保守的になっていくのについていけなくなつた。)小林秀雄は確かに偉い人らしかつた。しかし、

読んでいるうちに、私が「変わっている」せいか、どうしてもこの批評家のいつていることに不満を持たないわけには行かなくなつてきた。そのころ「三田文学」に書いたのが、「小林秀雄における批評の方法」で、これはその後、有精堂から刊行された『日本文学研究資料叢書 小林秀雄』に収録されている。

「三田文学」に載つたこの評論を読んで、まもなく反応を示していくれたのは、当時は冬樹社の編集者であつた森内俊雄氏である。森内氏は、まもなく作家としてデビューするが、そのころ『坂口安吾全集』の編集をしていて、その第六巻の解説を私に依頼してきたのである。私はその仕事で初めて「原稿料」というものをもらった。森内氏が作家であることを私は最初は知らなかつた。森内氏は私がそのころ熱中して読んでいたベルナノスに深い関心を持っていて、彼がまだ読んでいなかった『田舎司祭の日記』を貸したことがある。森内氏が私に坂口安吾について書かせたのは、私ができる前に「状況」という同人雑誌に「坂口安吾論」を書いていたらでもある。アメリカ文学者の亀井俊介や、後に俳人として名をなす平井照敏たちがそのメンバーであつた。

私が働いていた高校に石川先生という数学の教師がいて、その方のイニシアティブで研究紀要を作ることになり、私は「古代日本人の神話的思考」という長い論文を書いた。あちこちに抜き刷りを送ると、何人かの人たちが親切に反応してくれた。特に上田正昭氏の激励は忘れられない。また平野仁啓氏は、私

の批判に率直に答えられ、『古代日本人の精神構造』（一九八六年、未来社）の第四刷りで、私の意見を採り入れて訂正させられたのである。しばらくのちのことであるが、私が初めて『言語論の思想と展開』（三一書房）という書き下ろしの著作を刊行したとき、すぐに手紙で未知の私をばげまされた波多野完治氏のことも忘れられない。

このように、何かを書くことによって、人とのつながりが生じて、それをまた起点にして、次の出会いやつながりが生まれてくる。いくつかの研究グループに参加して、多くの刺激を受け始めたのも、まさに一九六八年のことである。その年に、私は長谷川宏、粉川哲夫、新田義弘、田島節夫の各氏たちの「現象学研究会」に参加した。それから八年後のことになるが、「現象学研究 特別号 メルロポンティ（一九七六年）にベルナル・パンゴーの「メルロポンティ サルトルと文学」を私が訳出したのは、この系列の仕事である。

また一九六九年には「はじまりの会」というグループに参加した。丸山静、戸井田道三氏が中心のメンバーで、庄司薫の赤頭布ちゃん気を付けてのヒロインのモデル、船曳由美さんも加わっていた。戸井田道三氏の落ち着いた話しぶり、丸山静氏の百科事典的で、パースのいう「無限記号連鎖」の具体化のようなく、止まるところのない語り、私はいつも圧倒されていた。丸山氏の『熊野考』は、いまでも私のかたわらにある。

このグループはやがて「現代批評の会」になる。メンバーは、

由良君美、水野忠夫、前田耕作、平井正、粉川哲夫、久保寛などで、池内紀氏の姿も一度見かけたことがある。昨年、平井正、前田耕作の両氏と私との三人が世話人になり、水声社から刊行され始めた『パフチン著作集』の訳者を中心にして、「パフチンの会」を始めたのは、このとき作られた人脈によってである。

こうした研究グループのメンバーに、大学の教師が多かったのは事実であるが、そのころ丸山氏も戸井田氏も定職なしで仕事をしていたのであり、彼らの生活が羨しかった。その研究会には、時々ま勉強な大学教師が来ることがあったが、自然に淘汰されていった。

会のメンバーたちは、誰もがとても冗舌だった。由良君美氏はいつもパイプをふかして、あるとき伊藤若沖の魅力について、終ることのない話をしていった。またメンバーはみんなよく勉強していた。川端香男里氏は二六か国の言語をあやつるといっ話だったが、千野栄一氏の東欧語の知識も計り知れないものがあった。

アメリカの哲学者C・S・パースに「論理学の第一の規則」という有名な論文がある。そのなかでパースは、まず第一に自分はあることを知っていないという認識が必要であり、次にはその知らないことを知ろうとする欲望が必要であり、そして三番目に、それを知る努力をしなければならないと書いている。「現代批評の会」で、パースが話題になることはなかったが、メン

バーのそれぞれが、このパースの格律を忠実に守っていたように思う。

丸山静氏のまわりでは、いつもデュメジルが論じられていた。私も日仏会館の図書館でデュメジルの『ケンタウロス』を借り出して読んだが（引用されている文章が見られない言語のものがあつて、わからない部分が多かつた）、あるとき、たまたま注文しておいたデュメジルの著作の一冊を紀伊国屋書店で買って、研究会に行き、丸山氏に見せたところ、彼は「無理を言つてすまないが、それは私がまだ読んでいないデュメジルの著作なので、この場で売ってほしい」といって、買って来たばかりのその本を持って行つてしまつたのである。知への限りない欲望がそこにあつた。

吉本隆明氏に言わせると、私は「三十をすぎて下手な評論を書き始めた田舎高校教師」であり、事実その通りだつたが、研究会のメンバーのおそろしいほどの知への欲望、そしてそれを語り出していくエネルギーに何とかがついでいきたいという気持は強かつた。高校の教員の給料はたかが知れているし、家庭をまつたくかえりみないわけにもいかなかつたが、無理をしても本は買つていた。妻に「あなたの愛人は本」と言われたことがあるが、むやみに買い集めた本は、いま私の部屋と書庫に巢を作り、まだまだ数を増していきそうな気配である。

このように、現在の私の出発点は、一九六八年ごろの私だつたといえるだろう。そのころのフランスの思想界は、ドゥル

ズ、フーコー、ラカン、アルチュセール、ロラン・バルトなど、追いかけるに多様なひとたちの活躍の場であつた。私がエドモン・オルティグの『言語表現と象徴』の翻訳を公にしたのは一九七〇年のことであるが、そのころ、そのなかで論じられているラカンのことは、さすがに研究会のメンバーもあまり論じてはいなかつた。ただし私は、ラカンの『エクリ』を一九六六年に買つている。そして分厚いその本を読み始めては見たものの、オルティグの著作しか道案内のなかつた当時では、あまりよく理解できたとはいえない。それでも、最近になつてラカンを読み直し、新宮一成氏の『夢分析』（岩波新書）が、ラカンの理論に基づいて書かれていることがどうにかわかるのは、一九六〇年代末にまがりなりにもラカンに接近しようとしたからだと思つ。一九六八年は、私にとって非常に重要な年だつたのだ。